

街の温かみ 周到な準備で

31日はハロウィーン。日本でも仮装パレードやパーティーなど、年々熱気が増えています。そんな中、子どもが近所を回ってお菓子をもらうイベントで、住民交流を深めている地域も。しっかりした準備が成功の背景にあるようです。



そもそもハロウィーンとはどんな日か。能登路雅子・東大名誉教授(米国文化史)によると、起源は古代ケルト人のお祭り。31日は旧暦の大みそかで、「あの世との通路が開かれる夜」と考えられた。その年の収穫に感謝し、死者の魂を鎮める捧げ物をする行事だった。

その後、キリスト教の影響を受け、11月1日の「万聖節」の前夜祭との位置づけに。19世紀にアイルランド移民によって米国に伝わり、1950年代ごろから、仮装したり子どもが家を回ってキャンディーをもらった

りする風習が広まったという。

能登路さんは、最近の日本での熱狂について、「常に新しい文化を貪欲に求め受け入れる日本で、現在進行形で定着している。仮装で自分を解放したり変身したりする外来の文化が、どう日本化していくかを見るのはおもしろい」と話す。



楽しみ方は千差万別だが、地域で住民交流をはかる動きが各地で広がっている。その一つ、横浜

市青葉区の住宅街で11年続く「たまプラ中部ハロウィン実行委員会」の南沢郁さん(52)にや

り方を教えてもらった。

イベントでは、地元の子がグループごとに、ボランティアでお菓子を提供してくれる家を訪ねて回る。参加希望の子は年々増加。今年は200人の定員に40人がキャンセル待ち。背景には、数カ月前から始める周到な準備がある。「毎年試行錯誤しながら改良している」と話す。

まずは実行委のメンバー集め。イベントは当初、大学生が中心となり始まった。その後、南沢さんら住民や大学生が実行委員会をつくり続けてきた。当日は委員以外の住民も手伝う。自治会の理解も不可欠。同委は毎年9月始めまでに自治会にイベントの概要を説明し、終了後は1人3000円の参加費(保険代50円を含む)の収支などの報告を欠かさない。「協力があ

って初めて出来る。行事に参加しない人への配慮も大事です」



お菓子を負担するボランティア家庭を探す

のは課題の一つ。回覧板などで募っているが、子どもの応募者と比べ不足がち。ただ、参加した高齢者世帯などからは「またやりたい」「街の温かみが増してうれしい」との感想が寄せられる。用意するお菓子はアメや駄菓子で十分。「子どもは何をもらったかではなく、家を訪ねて人に会うことを喜んでいいる」という。

10月は毎週末、準備に追われる。それでも「単なる子どものイベントではなく、普段は接点がない世代が交流できるのが一番の魅力」と南沢さん。自ら仮装した住民がうれしそうにお菓子を配る姿や、子どもたちの笑顔は、「想像をはるかに超える感動があります」。

(中村靖三郎)

地域でハロウィン

準備の手順

実行委員会の立ち上げ

学生ら若者の協力が大きな原動力に

自治会へのあいさつ

回覧板や掲示板でも住民に周知

参加する子ども・お菓子を提供してくれる家庭 （「お菓子の家」）の募集

安全にできる範囲内で、子どもの参加人数を決める

保険の手配

子どもがケガをしたり、訪ねた家で物を壊してしまったりするのに備える

回る経路の選定

小さな子でも歩ける距離か、危険な場所はないかなどをチェック

イベント当日

終了後…

お菓子の家へのお礼

子どものメッセージや当日の写真があると喜ばれる

自治会に会計など報告

収支・活動内容を明らかにする

たまプラ中部ハロウィン実行委員会への取材から



☆ポイント☆

- 回るグループごとに引率者(大人)をつける
- 経路は事前にしっかり下見する。交通量が多い場所などには大人が立って見守る
- 「帰宅するまでお菓子を食べない」などルールを決めておく
- 「お菓子の家」には、何時に、何人が訪問するか、詳細に伝えておく

